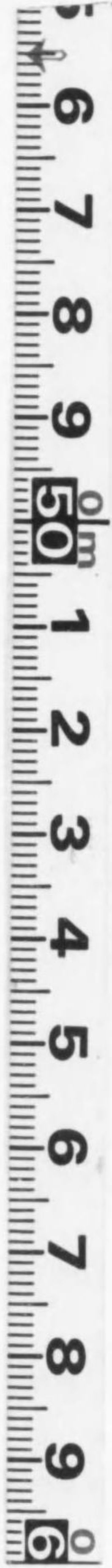


特234

520

歌取教水と
日向此粒

正岡平三博士全集



始



特 234
520



歌聖牧水と
日向の歌

延岡パンフレット協會編



なつかしき城山の鐘鳴りいでぬ
あけなかりし日聞きしごとくに

(延岡市 長田親禪氏藏)

なつかしき城山の鐘鳴りいでぬ
をさなかりし日聞きしごとくに 牧水

ふるさとをの美
々津の川のみ
なかに獨りし
母の病みたまふ
らむ

病母を思ふ一首

水

ふるさとをの美
々津の川のみ
なかに獨りし
母の病みたまふ
らむ

病母を思ふ一首
水

(東郷村 越智通輔氏藏)



久し振りに故郷に歸り來
 れば舊友矢野伊作、富山豊
 吉の兩君この板を持參して
 氏神に奉る歌書けといふ
 すなはち 氏子の一人
 若山 牧水

うぶすなのわが氏
 神よとこしへに
 村のしづめとお
 はすこの神

(東郷村 坪谷神社藏)

(富高町 藤井儀三郎氏藏)

ふらふらの尾鈴のやまのかなしきよ
秋もかすみのたなびきてをり 牧水

ふるさとの尾鈴のやまのかなしきよ
秋もかすみのたなびきてをり 牧水

(延岡 長田観禪氏藏)

いさくしふしホく見てねふりし
おのの庭にくまなき秋の月夜を
あつらひし
かゆも
あつらひし
あつらひし

うら寒く心なり来て見て 牧水
ぞをる庭にくまなき秋の月夜を

若山牧水略年譜

明治十八年

一 歳

八月二十四日（陰曆七月十五日）朝宮崎縣東臼杵郡東郷村坪谷一番戸（現在三番地）に生る。父立藏、母まき、家業醫、三姉あり、繁と命名さる。

明治二十二年

五 歳

父立藏西郷村醫に聘せられ牧水も一家と共に同村田代に轉住す。

明治二十五年

八 才

四月、田代尋常小學校第一學年に入學せしも、通學距離一里餘、甚しく不便なれば、二三ヶ月にして義兄今西吉郎校長たる羽坂尋常小學校に轉校、山陰なる叔父の家より通學す。

十月、父立藏坪谷區より歸宅を勧められ坪谷に歸る。

よつて牧水も羽坂校より坪谷校に轉ず。

明治二十九年

十二 歳

三月、首席にて坪谷尋常小學校を卒業。

四月、父母の膝下を離れ、延岡に出で、同町延岡高等小學校第一學年に入學。當時尋常科四年制にして宮崎縣の僻地に於ては高等小學の設立されし所少く、高等科入學のために出郷せるなり。同町外恒富村三ツ瀬の知己佐久間氏方に寄寓してこゝより通學す。佐久間氏に兒なく、夫婦俱に愛で慈しむ。

明治三十年

十三 歳

三月、第二學年に進級。常に級の上席にありて第三席を降らず、作文算術はその得意とせる所なり。

當時牧水の受持教師に日吉昇氏あり、土地唯一の文章家として自他ともにゆるせし人、氏特に牧水の文才を愛し大いに矚目せらる。級中作文に於て嶄然頭角を顯す。

牧水は腕白者なりき。色黒く小作りにして競走にては常に先頭を切り二着と落ちしことなし。

この頃より村井弦齋著小猫櫻の御所等を讀み始む。

明治三十一年 十四歳

第三學年に進級。通學の都合其他の關係にて佐久間氏方より轉じて本小路俗稱御殿下山邊氏方に寄寓す。同氏方に區裁判所書記某氏の同じく寄寓するあり。この人文章を好む。牧水の文才に驚き、知人によくこれを語れり。文學に對する憧憬更に加はる。

明治三十二年 十五歳

第三學年を修業す。

此年延岡にはじめて縣立中學校設立さる。牧水直ちに入學試験に應ず。當時延岡には藩主内藤子爵の古く設立されたる亮天社と稱する中學程度の私學校あり、はじめて縣立中學校の設立さるゝに及び同社の二年級又は高等小學四年卒業生など俱にこの入試に應ず。牧水この内にありて第四番の成績にて入學す。同校寄宿舎明徳寮に入る。副生長たり。新校長に山崎庚午太郎氏あり、年齒漸く二十九、年少氣鋭、夙にスパルタの教育法に私淑し校則峻嚴敢て假借せず。史學專攻の人なりしも文藝豊かにして校友會雜誌等に華麗の文を寄す。蓋し牧水に及ぼせし影響少

なからざるべし。

國漢文教師榎井秀次郎氏に愛せらる。明徳寮は毎月一回土曜日の夕茶話會を催すを例とす。講演會餘興のうち牧水の國文朗讀はその白眉として好評を博す。

明治三十二年 十六歳

此年三月山崎校長逝去す。

二年級に進む。運動競技等より漸く離れはじむ。數學に對し嫌惡の傾向を生じ、國漢文に傾倒し盛に文學の書に親しむ。ひそかに馬琴の八犬傳を求め之を耽讀す。當時生徒は一般に小説類の繙讀を嚴禁せられしも文學に對する熱意は外出先より禁書を携へ來り、就讀するに到らしむ。偶々一夜舎監に發見され禁書の火中を命ぜらる。借本なりければ百方寛恕を乞ふも許されず、遂に泣く／＼寢下の灰となす。此頃より寮の窮屈なる生活を潔とせず。

擊劍の稽古中横面を打たれて鼓膜を破り晩年まで左耳の不自由を感じるに到りしもこの年の事ならむ。

明治三十四年 十七歳

三年級に進む。

寮を出て同級の友本小路なる大見達也方に寄寓し通學生となる。これより文學書繙讀の自由を得。「文庫」「新聲」等の雜誌により新文學の感化を受く。和歌を作り始めしも此頃のことなり。

當時、歌文の友に大見達也、鈴木財藏、(今の平賀春郊)直井敬三、村井武、百溪藤郎太、小曾戸俊男等あり。大見に教へられて初めて投書なることを知り、佐々木信綱選の中學文壇(北上屋發行)所に投ぜし一首直ちに天位に當選し、諸友驚愕す。直井、鈴木、と共に歌會野虹會を起し常に詠草を「日州新聞」に投稿す。後、その頃熊本にありし従兄若山峻一(氷花と號す)に教へられて「明星」其他の新短歌あるを知る。當時、藤村泣菫の詩を愛讀し、夫等及び「一葉全集」をば誦誦するを常とせり。

明治三十五年 十八歳

二月頃、同級の鈴木財藏、直井敬三、阿南卓、小曾戸俊男、村井武等とはかりて曙會を起し毎月一回回覽雜誌「あけぼの」を發行す。

三月、四年級に進む。

白雨、(後に雨山または野百合とも號す)の雅號にて盛んに新詩社風の歌を作る。

六月、従兄峻一歸郷してより牧水これと逢ふ機會多く少なからずその感化を受く。「新聲」「中學世界」「秀才文壇」「獨立」「國文學」「青年界」「文庫」等に盛んに歌或は散文を投ず。

九月、大見方より再び佐久間方に轉ず。

十一月、肥筑の野に陸軍の大演習行はれ、大元帥陛下の行幸あり。これを期として全校同地方に修學旅行をなす。牧水は従來修學旅行に参加せず其の期間歸郷するを例とせしが級友の勧めに依り本年始めて之に参加し第四分隊に長たり。途に各隊軍歌を高唱す。牧水の隊はその音頭するところ、被行く／＼朗吟し以て部下に唱へしむ。期せずして首尾一貫せる軍歌をなす。同旅行の一挿話なり。

この年、後日牧水の文學專攻を決心する因を與へたる柳田友麿氏英語教師として赴任す。

明治三十六年 十九歳

二月中旬、胃及び肝臓を病み四十度前後の發熱ありしも、旬日餘にして快癒す。
五年級に進む。

四月末、遠縁に當る中學の教師黒木藤太氏方に轉宿す
五月、校友會雜誌部々長に擧げらる。
年來持續せる父の業醫學を專攻するの方針を變更するの意漸く動く。

教師柳田氏頭腦明敏、受持は英語なれど國漢數行くとして可ならざるはなし。壇上に立ちて琵琶行の詩を誦し、鐵幹、晶子等の新詩を口づきみ之を生徒に英譯せしむ。同氏の慧眼よく牧水の詩才を識り、醫に趣くことを惜み文學に專念せんことを豫感したるが如し。

十二月中旬、卒業後の目的の相談のため校長御手洗氏を訪ひて早稻田大學入學を勧めらる。
明治三十七年 二十歳

一月、雅號野百合を牧水と改む。牧は慈母の名まき、水は幼時より水を愛せしがゆゑなり。
二月、卒業後の目的につきしきりに頭を悩ます。柳田氏西洋文學の必要を説き極力早稻田入學を勧む。

三月、遂に早大文科に學ぶことを決意す。

同月、四十七人中七番の成績にて延岡中學校を卒業す
二十九日卒業式。その夜送別會あり、中町の喜壽亭といふに痛飲し快をさけぶ。翌々三十一日、住み馴れし延岡を去りて歸郷の途に就く。

四月、一日、歸郷。同四日出郷。上京後麴町區三番町に下宿し、直ちに早稻田大學文學科高等豫科に入學す
五月二十二日、本郷西片町に始めて尾上柴舟氏を訪ふ
上京後まもなく同級の中林蘇水と知りしが、六月、北原白秋(當時射水と號す。)と知る。

七月、中旬より約一ヶ月を相州葉山なる玉藏院に暮す
八月、東京に出でしが脚氣にて玉川に轉地す。

九月、東京に歸り戸塚穴八幡下の下宿に北原白秋と同宿す。まもなく藤田進一郎と知る。中林蘇水、北原射水、若山牧水の三名を「早稻田の三水」と稱す。
明治三十八年 二十一歳

前年より尾上柴舟氏の門に入らせしか、同氏主宰の車前草社同人となり前田夕暮、正富汪洋、三木露風、有本芳水等と知る。

が、尾上柴舟氏に印刷費一部の援助を乞ひなどして、七月辛くも發行す。

發行部數七百、その三分の一に賣れず、貧に迫りて殘本を古本屋に賣却す。一部賣價八錢也。
七月、早稻田大學英文科を卒業す。

明治四十二年 二十五歳
一月末、昨年よりの某女との戀愛のため闊々の情を抱いて房州に遊び、二月中旬歸京。

三月、早稻田鶴巻町八雲館に轉宿す。富田碎花、尾山篤二郎、永田靜雄、光川穆等と知りしもの頃なり。
四月十八日、本郷聯隊區に於て徴兵検査を受け不合格

七月、中央新聞社社會部に入る。
十二月、中央新聞社退社。

明治四十三年 二十六歳
一月、名古屋市熱田なる八少女會より第二歌集「獨り歌へる」を出版す。

三月、書肆東雲堂より詩歌雜誌「創作」を創刊す。
四月、歌集「別離」を東雲堂より出版す。
八月末、實生活の苦しさと一昨年來の戀愛事件との煩

早稻田大學英文科本科に進級。藤田進一郎、三澤豊、土岐哀果(善慶)仲田勝之助、安成貞雄、佐藤綠葉の六名と共に北斗會を結び毎週一回集りて小説の創作批評に努む。福永挽歌(渙)原田讓二、吉井勇等と知る
明治三十九年 二十二歳
記すべき材料なし。

明治四十年 二十三歳
二月、牛込櫻町に中學よりの親友直井と同居す。

四月同南履町に轉居、直井と同宿。
七月、暑中休暇中直井と共に郷里日向に歸省す。

九月、上京、牛込原町に轉居。
十月、安成貞雄等と共に「新聲」(隆文館發行)を編輯す。

十二月、冬期休暇を利用し房州根本にありて歌作す。滞在十日間。
明治四十一年 二十四歳

二月、某女と戀に陥る。
初夏、處女歌集「海の聲」の出版に着手するや印刷半ばにして出版書肆倒壊し、時偶々卒業試験最中なりし

に耐へかね漂浪の旅に出で、先づ甲州より信州に入り更に越後に越ゆむとせしが、急に思ふところありて歸京す。旅中、山本鼎、山崎斌等と知る。

明治四十四年

二十七歳

一月、創作社を起し、東雲堂の後援により引續き「創作」を發行す。

四月、清水谷公園に創作社大會を催す。同月飯田河岸より澁橋町柏木に居を移し、博信堂より歌集「路上」を出版す。

郡山幸男(經堂)と知る。

九月、創作社を解散す。

十一月、横濱を漂浪す。

やまと新聞社社會部に入社、約二ヶ月にして退社。

明治四十五年(大正元年)二十八歳

三月上旬、「牧水歌話」の出版を待ち、直ちに信州に旅立つ。

四月二日、當時信州結核ヶ原に歸省中なりし太田喜志子に逢ひ、それより甲州を経て歸京す。同十三日、石川啄木の臨終に遭ひ種々奔走す。

もこの頃なり。

九月、親山書店より「みななかみ」を出版。

十月、伊豆神子元島の燈臺守なる舊友古賀安治を訪ひ一週間滞在、その静かなる生活を羨み、自らも燈臺守ならむかなどと空想す。

大正三年 三十歳

三月末日より四月一日にかけて創作誌友大會を開催。

四月、新聲社より歌集「秋風の歌」を出版。

この年は旅行らしき旅行もせず、雑誌「創作」のため奮闘せしが、十月號以後休刊の止むなきに至る。

十二月、妻喜志子發病、年を越す。

大正四年 三十一歳

一月、喜志子小石川雜司ヶ谷なる大學病院分院に入院翌月退院す。

三月、醫者の勧めにより病妻のため神奈川縣三浦郡北下浦村に轉地し、親子三人の静けき朝夕を送る。

四月、自選歌集「行人行歌」を植竹書院より出版。

七月、八月にかけて信州北佐久の春日温泉に滞在す。

十月、博信堂より歌集「砂丘」を出版す。

五月「創作」に代るべき短歌雜誌「自然」を發行せしも、一號のみにて止む。同月太田水穂氏夫妻媒酌のもとに喜志子と結婚、新宿町二丁目森本酒店の二階假寓す。月末、單身相州三崎に赴き、海の歌百餘首を作る。

七月中旬、郷里の父危篤の報に接して歸郷す。間もなく明治大帝薨去、大正と改元。

九月、東雲堂より歌集「死か藝術か」を出版す。

十一月、父死去。その後郷里に引籠るべく近親者に説かれ、進退に惑ひ煩悶快愼す。歌集「みななかみ」に殘れる破調の歌は多くこの間の作なり。

大正二年 二十九歳

一月、南九州一巡の旅を試む。

五月、遂に意を決して周囲の反對怨訴を顧みず再び出京の途に上る。途中愛媛縣岩城島なる三浦氏別荘に滞在、歌集「みななかみ」の編輯をなす。

六月、上京。小石川區大塚窪町二〇番地に一戸を借り郷里信濃に歸省中長男旅人を擧げたる喜志子を呼寄せ八月、「創作」を復活し太田水穂氏後援の下に續刊。貧窮の生活を送る。尾山篤二郎の加賀より上京寄寓せし

十二月、長女禰子出生。

大正五年 三十二歳

三月、岩手青森と東北各地を旅行し、五月歸宅。

六月、散文集「旅とふる郷」を新潮社より、歌集「朝の歌」を天弦堂より出版。同月事情ありて一時轉宿す十月「早稻田文學」に發表せし小説「夢の秋」はその時の作なり。親友福永漢一家の同地に移住するあり、また相馬泰三と知る。

七月、單身上京。本郷湯島天神町梅屋に下宿、三四ヶ月間滞在す。

十一月、自選歌集「若山牧水集」を新潮社より出版。

十二月末、俄かに一家を東京に引上ぐることにたり、廿八日小石川金富町五〇番地に移る。

大正六年 三十二歳

二月、休刊中なりし「創作」を復活。四月「和歌講話」を天弦堂より出版す。

四月、郷里より老母を伴ひ上京、一ヶ月滞在す。

五月、巢鴨町天神山に轉居。

六月、上州妙義山に旅行す。

八月、夫婦合著の歌集「白梅集」を情抒詩社より出版
同月秋田より新潟に出で信州に入る旅行をなす。

大正七年 三十四歳

一月一日、青森より来訪中の加藤東籬を伴ひ伊豆土肥
温泉に赴き、三四日にして歸宅。
二月、單身再び土肥温泉に赴く。

四月、次女眞木子生る。

五月、歌集「溪谷集」を東雲堂より出版。同月九日出
發、京都大阪に遊び比叡に一週間を籠り、更に奈良に
遊び和歌の浦より乗船、熊野に行き、奈智に遊び、勝
浦より鳥羽に渡り、伊勢を経て歸京。この間一ヶ月餘
七月、歌集「さびしき樹木」を南光書院より、散文集
「海より山より」を新潮社より出版。
十一月、上州伊香保より沼田を経て、利根の水上に遊
ぶ。

大正八年 三十五歳

一月、元日より三日間千葉縣犬吠崎に遊ぶ。

四月、上州磯部に一週間滞在。

六月、榛名山上湖に遊び二泊して歸京。

なる生活を營む。

十二月、聚英閣より評論集「批評と添削」を出版。

大正十年 三十七歳

三月、伊豆湯ヶ島温泉湯本館に滞在、同月、新潮社よ
り歌集「くろ土」を出版。

四月、次男生る。富士人と命名。

五月、六月にかけて京阪より岡山高松に遊ぶ。旅中神
戸なる伯父長田虎次郎死去。

七月、紀行文集「静かなる旅をきつつ」をアルスよ
り出版す。

九月、中旬より信州白骨温泉に約一ヶ月滞在。それよ
り焼岳を越へ飛騨に出で、富山を経て信越線にて十一
月初旬歸宅。

大正十一年 三十八歳

一月、土肥温泉滞在中、條虫の寄生せるを知る。月末
歸宅後間もなく重き流行性感冒に罹る。

三月、四月にかけて伊豆湯ヶ島温泉に滞在、山櫻の歌
を多く詠む。

六月、選歌集「路行く人々の歌」を日本評論社より出

八月、巢鴨町一四九三番地に轉居。同月末九十九里片
貝に二三日遊ぶ。

九月、紀行文集「比叡と熊野」を春陽堂より出版。

十月、信州香掛温泉に滞在、それより信州を一巡して
十一月末に歸京。

十二月、千葉縣大原海岸に二三泊の旅をなす。

大正九年 三十六歳

二月、沼津狩野川口より乗船、伊豆下田に遊ぶ。同月
聚英閣より選歌集「花咲ける曠野」を出版。

四月、秩父長瀨に遊び二三日にして歸京。

五月、上州吾妻の溪谷川原湯温泉に十余日滞在、それ
より草津に出で白根を越へ信州湯温泉に出で木曾を經
て歸京す。

八月、年來の希望なりし田園の生活に入らむため、靜
岡縣沼津町在楊原村上香貫に一家の移住を決行す。當
時その主宰せる雜誌「創作」も經營困難なりしが、廢
刊するに忍びず、義弟長谷川銀作（當時横濱）に經營
一切の事務を托し、横濱より發行の運びとなす。沼津
移住後は諸新聞雜誌の短歌の選を業とし、比較的靜か

版す。

七月、再び「創作」の經營を自己の手に移す。沼津移
住も半永久的の決心つきたればなり。

十月、初旬より十一月初旬まで一ヶ月、上野より下野
日光方面に旅行す。

十二月、「短歌作法」を春陽堂より出版。

大正十二年 三十九歳

一月、土肥温泉に滞在、静養の傍歌集「山櫻の歌」の
編輯をなす。

四月、創作社大會を沼津に開催す。

六月、歌集「山櫻の歌」を新潮社より出版。

七月、珍鳥佛法僧を聞くべく三河國鳳來寺山に遊ぶ。

八月、家族と共に西伊豆海岸の古宇に滞在。

九月、一日、同地に一人居残りて大震災に遭ふ。沼津
なる家族の安否を氣づかひ直ちに歸宅、その無事なる
を喜ぶ。而して京濱地方の知人社友の安否を氣づかひ
人をして震災地を慰訪せしめしが、此時自己の物質的
に恵まれ居らざるを頗りに慨嘆す。

十月、下旬、御殿場より籠坂峠を越へ甲州に出で八ヶ

嶽の裾を経て信州に入り、千曲川上流より更に秩父に遊ぶ。

大正十三年 四十歳

一月、例により土肥温泉に滞在。

三月、長男旅人を伴ひ、亡父十三回忌法養のため日向に歸郷す。

五月、童謡集「小さな鶯」を弘文館より出版す。

六月、甲州身延より七面山に登る。同月、紀行文集

「みなかみ紀行」をマウンテン書房より出版。

八月、上香貫より千本濱に移轉す。

九月、住家建築の資に充つるため自らの半折短冊揮毫會を起し、第一回を沼津にて開催、好成績を擧ぐ。

十一月、東京にて第二回揮毫會を催す。

十正十四年 四十一歳

一月、京阪地方に半折揮毫會を兼ねたる歌會あり、夫妻にて出席、十日餘滞在。

二月、隨筆集「樹木とその葉」を改造社より出版。同月、半折揮毫會にて得たる金にて沼津市市道町（千本松原の蔭）なる現在の住宅地約五百坪を求め、四月地

思ひ立ち、喜志子同伴北海道に向けて出發、七十餘日を経て、十二月上旬歸宅す。

昭和二年 四十三歳

五月、夫妻同伴、朝鮮旅行に出づ。例の揮毫行脚なれど、また漫遊の意も大なりしが如し。然れども氣候風土の慣れざると積年の行脚の疲勞とにて七月初旬脚を病みて退鮮、歸途郷里日向の國坪谷に老母を見舞ひ亡父の墓參をなし、好める山川の寫眞十數葉を撮らせなとして七月末歸宅。二ヶ月餘を脚部の疾患のために苦しむ。九月伊豆船原温泉に入湯、漸次快方に向ひしが爾來神經衰弱症に罹り、兎角健康すぐれず、自宅に引籠りがちなりき。

昭和三年 四十四歳

二月、草鞋脚絆にて西伊豆を江梨まで二三泊の小旅行をなす。

三月、初旬、箱根を越へ東伊豆を一週し天城を越へて歸宅。

八月末、甲州下部温泉に赴き、滞在靜養の苦なりしも湯治客雜沓のため二泊にして歸宅す。

鎮祭を行ふ。

六月、信州各地及び美濃大井町に、七月千葉縣多古町に、八月栃木縣喜連川町に各半折揮毫行脚を行ふ。一方、住宅の建築にかゝり八月四日上棟式を擧ぐ。眞に東奔西走なり。

十月、新居落成、直ちに移轉、同月末九州方面の半折揮毫行脚に出發、十二月末歸宅。同月、自選歌集「野原の郭公」を改造社より出版す。

大正十五年（昭和元年） 四十二歳

一月、多年の宿望なりし詩歌綜合雜誌の發行を企て、専心その準備をなす。

五月、大悟法利雄を編輯助手として「詩歌時代」を創刊す。各方面に多大の反響あり。

六月、濱名湖を舟にて渡り箱山寺に參詣、氣賀町より奥山半僧坊に詣で、陳座峠を越へ三河の新城町に出で鳳來寺山に遊ぶ。

九月、非常なる意氣込にて始めし「詩歌時代」經營に陥りしかば、止むなく十月號限りにて廢刊の決意をなし、缺損補填その他のためまたノノ苦しき半折行脚を

九月、初旬、日光浴のため兩足趾部に火傷を負ひ臥床それより下痢發熱と共に種々の故障起り全身的に衰弱甚しく、十三日醫師より重態を宣告され、十七日朝七時五十八分、遂に永眠す。
法名、古松院仙譽牧水居士。

ふるさこの尾鈴の山のかなしさよ秋もかすみのたなびきて居り

朝づく日うすき紅葉の山に照りつちもぬくみて鶉鳥の啼く

獨りなれば秋の小山の日だまりの朝の日かけを酒こ酌まうよ

ほこ照れりわが吸ふほごの風もなき山の窪地の秋の朝の日

蠟燭のこもるにも似む朝づく日かなしき山をわが歩み居り

眼や病める涙ながれてはてもなし秋の朝日の裏山行けば

秋のおち葉榊檀の木にかけあがり来よこ兒猫がわれにいぎめる

爪延びぬ爪を剪らむこ思ひ立ち幾日すぎけむ日日窓晴るる

まだら黄に枯れゆく秋の草のかけ啼くこほろきの眸の黒さかな

草山に膝をいだきつまんまろに眞赤き秋の夕日をぞ見る

草山にねてあるほごにあかあかこ去にがてにすこ夕日さすなり

樹のかけぞながうなりゆく山の端の秋の夕日に染みつつ居れば

阿蘇荒の日にかもあらめうすうすこかすみのごこく秋の山曇る

ながめるとなつかしがりしこの山にいまこそ登れなみだのごこく

さりわけて夕日よくさす古家の西の窓邊は父のよく居るごころ

ほたほたこよろこぶ父のあから顔この世ならぬ尊さに涙おちぬれ

父よいざ出でたまへたすけまるらせむこの低き岡越ゆるここなにぞ

わがそばにこころぬけたるすがたしてこすれば父の居るここ多し

さきのここ思ふこきならめ善き父の眉ぞくもれる眉ぞ曇れる

親子兒のなかのかなしき約束の解かれぬままにいま朽ちむこす

秋の日あし追ひつうつる群をおひ父ひもすがら蠅うちくらす

二階の時計したの時計がたがへゆく針の歩みを合はせむこ父

父がのを聞くがづらさにわれもせし咳くせこなりあらためがたし

老いふけし父の友さちうちつさひ酒酌む冬の窓の夕陽

この爺おぢのかほもいづれもみななつかしみな善き父に似たる爺おぢたち

かくばかり踏まれてもなほうすすき青き芽をのみふくこすや生命

蜜蜂も赤く染まりて夕日さすかなしき軒をめぐるなりけり

痛き玉掌にもてるごこしふるさこの秋の夕日の山をあふけば

あかあか秋の入日にそめられて落穂ひろへる姪かあらじか

夕日の家かすをたがへて時をうつ古き時計も生きたるごこし

なにをかもよろこびこせむふるさこに埋るる身は梨腐るごこし

眼いつばいに悲しき顔の見えてきぬわれの疲勞のなかより來にけむ

壺のなかにねむれるごこしこのふるさこかなしみに壺のすきこほれかし

つるむ小鳥うれたる蜜柑おち葉梅檀家をめぐりて夕陽してあり

梅檀の葉に秋のきたるは質わるき玉のひそひそ光れるごこし

太陽にむかひしがめつくせるわがつらの皮膚のこはばりも朝はうれしき

園には鶏蜜柑朝の日枇杷のはな父がたちいで摘める柚子の實

しんしんご頭痛めり悲しき幻影輝ける市街の停車場の見ゆ

しんしんご頭痛めり悲しき幻影下の關の海峽に高き窓つくる

憎まれ者のわれに媚びむごするところにやわが部屋に鏡臺を置くこいふ姪

鱈のみ食ひつつ幾日すぎにけむ梅檀の葉の日日散る家に

煙草の灰がほつたりご膝におちしごきなつかしき瀬の音聞えくるかな

おお夜の瀬の鳴るごごよおもひではたごごだえてさびしき耳に

一ごころ山に夕日のさせるごごく東京の市街をおもいてぞ見る

すばかりちいさき繪にも似て見のれおもひつめたる秋の東京

數寄屋橋より有樂座見るものごしにこころをなしておもふ秋の市街

相模の港津の國のみなこいづくもみな秋なるらむ旅をしぞおもふ

菜を洗ふ話なれども夕日のなかわかきをなごの聲のよろしさ

味氣なき夕なるかな眼の前の膳の酒さへ爐の焚火さへ

山に風來ぬ山ぞ鳴る冬の午後の日うす赤きなかに

膝にぬむれる兒猫のこころにも觸れぬやふ心かなしき冬の日たまり

窓の前の林に風の吹きすさびけふも啼き啼きすぎし小鳥よ

軒端なるちひさき山も鹿の子まだら紅葉となりて秋は來にけり

一りんの冬の薔薇のうすくれなるなつかしきものに手にもこるかな

冬の薔薇われを憎める姉の娘が折りてあたへしくれなる薔薇

わが園の山梔子の實の日ごこきいろ黄くなりまさりゆき雪も降らず居り

くちなしのちひさく黄なる實をふたつにさけば悲しき匂ひ冬の陽に出づ

わが生まは浪海のなかなるひみつつの浪まつさをの浪ゆたゆたの浪

久しくひかりを見ざる眼のごこくそこひ痛みて友のこひしき

爲すこもみな悔まならざるなき我が日今朝も新しく輝きてあり

薔薇の花びらのごこく鮮かに起きてあり薔薇の花びらのごこく冷たき朝に

愛すべきは朝の光線なりまごこに光線にむかへる我が疲れし瞳なり

さるにても不思議なるはわが健康かな鐵の碎片のいよいよ黒く輝けるごこし

くだものごこき港よ横濱の思ひ出は酸く腐り居にけり

黒き帽子黒き背廣着て街路ゆくこありめづらかに來し友のたよりに

さなりけに都は冬につめたくて汝が戀人も輝きてあらむ

健康の完まったかりせばこのさびしさ消えむかとおもふ朝冷えし鏡

あはれ悲し玉にくもりのなきごこく健かならむ健かならむ

われを恨み罵りしはてに嘸つみたる母のくちもこにひみつつの齒もなき

斯る氣質におはする母にねがはくは長き病の來るここなかれ

母が愛は刃のごききものなりきさなりいまだにそのごこくあらむ

そそくさミタ陽にうかみ小止みなく働く庭の母を見じこす

夕されば爐邊に家族つぎひあふそのこきをわれはもこも恐れき

母にも姉にも對座をいこふ臆病のわれのこころの澄みたるかなや

飲むなミ吐り吐りながらに母がつぐうす暗き部屋の夜の酒のいろ

わづかの酒に酔ひては母のつねに似すくちかろく夜のかなしかりけり

猫が踊るに大ぐちあけてみな笑ふ父も母もわれも泣き笑ひする

あはれ今夜のごまく家族のこころみないろいろにあれいろいろにあれ

姉はみな母に似たりきわれひこり父に似たるもなにかいたまし

くちぎたなく父をののしる今夜の姉もわれゆえにかまこころ怯ゆる

あわれみのこころし湧けるまきならむしみものいふ母の悲しも

母をおもへばわが家は玉のこまく冷たし父をおもへば山のごまく温かし

くづ折れてすがらむすれ母のこころ悲哀に澄みて寄るべくもなし

こころより母を讃ふるまきのありそのまきのわれのいかにかなしき

うちつけにもいふこころをも恐れ居るその兒をなほし憎みたまふや

なま傷にさはらぬやうに朝夕の世間話にも氣をおく納戸

ひみを憚りてわれを叱れる父の聲きかむこして先づ涙おちぬれ

父も母くちをつぐみてむかひあへる姿は石のごこくさびしき

家に出づる羽蟻の話も案のごこくこの不幸者のうへに落ち終りたり

母姉われ涙ぐみたる話のたえま魚屋入り來ぬ魚の匂へる

なぜにかく蜂多きならむわが家の軒のめぐりは蜂ばかりなり

斯くおほく蜂に見馴れてはいつしかに友だちのごこもおもはるる冬

酔ひざめの水の飲みすぎしくしく小腹の痛みて冬の朝來ぬ

こきごきに部屋より出でて身に浴ぶる冬の日光のうす樺いろよ

帽子なしに歩くくせつきしふるさこの冬の日光のわびしいかなや

母の聲姪の泣くこゑりりりの肉聲さびしわが家の冬

西の窓の障子の紙が血のごみく夕陽にぞ染む父の背後に

鶏ぬすむ猫殺さむ深夜の家に父と母とが盛れる毒藥

泥棒猫をころして埋むる山際の金柑の根のつちの荒さよ

死んだ猫をさけし指さきに金柑をつみてくらへきたなしとせず

ほこほこ不要となりし父のテーブル借りきて二階の窓邊にぞ据ゆ

前の山より照りかへす冬の日光のしづけき明るみ包めり書齋を

その障子もこの窓もみなしめきりて冬の夕陽に親しみて居り

椅子ながら山山の間を落日を見居れば二階父の入り來ぬ

葉よりさらにみごりに透けるちさき蟲薔薇の葉に居りき夕陽に透ける薔薇よ

薔薇の葉を食ふ蟲を見出だしこの部屋のなにやら明るくなりし思ひす

夕陽のかけちひさき黒き蟲のふん机に散りてあり薔薇に蟲居り

鹿の角を十四五本もなけ入れし古びし箱を見いでけり朝

父が獵りしものなり云ふ鹿の角眞黒くすすけ寶石に似る

低聲に卑俗なる唄うたひつつ夕陽の椅子を離るるはよき

褪せておればつぎなる小枝さして置く薔薇をわれこの冬の幾日

斯くあきらかに秋の日光がわが肌にさせるは痛き冷笑に似たり

わが肌に觸るるもの眼にうへるものいつれか痛き冷笑にあらざる

信ぜむさねがひ信じたりとおもひ思へどもこの何處にか細き風吹く

わが朝夕の生活をうすき板のまじく思ひて裏より覗かむとする

はたみ踏みつけむわが生の地にも斯のまき冬の夕陽が散りてあるべしと思ふ

わが窓に黒き幕来て垂れてあり汝が生を静かにはぐくめよきて

泉のまきくわれを見守るもあり杜鵑の如くかすめ行くもあり悔ぞ群れたる

起き出でて戸を練れば瀬はひかり居り冬の朝日のけぶれる映に

今朝もよく晴れたり今し朝食後の散歩に越ゆるちひさき冬の山

五日がほぎ讀書に過ぎぬつかれたる暗き頭に親しきこの冬

静かなる冬の日わきてけふ一日朝よりこころ死せるがまききに

机のうへの二りんの薔薇にも愛憎の湧く日なり眼昏し

こころ怒れば血さへ烈しく身にはうつ寂しいかなやわが膚を見よ

青杉の大枝をさせば北窓の机小暗しわれの讀書に

山河みな古き陶器のごまくなるこのふるさこの冬を愛せむ

十一月三日、今年はずでに天長節の日にあらず悲しみてうたへる歌三首
曇りなき十一月三日の空の日のかなしいかなや静やかに照る

かしこしやこの一もこの菊にさへ大御心ののこれるごまし

野に生ふる草山にそびゆる樹のごまきこのこころもて悲しみまつる

黒 薔 薇

納戸の隅に折から一梔の大鎌あり汝が意志をまぐるなごいふが如くに

飽くなき自己虐待者に續ぎ來たる朝朝のいかに悲しき

新たにまた生るべしわれごわが身に斯く言ふごき涙ながれき

静かにいま薔薇の花びらに來て息へるうすきいのちに夜の光れり

こころづけば鏡に薔薇がうつりてありつごわが顔の動けるそばに

ふみ觸るればしごきに揺れて陰影をつくるくれなるの薔薇よ冬の夜の薔薇

ひらかむとする薔薇散らむとする薔薇冬の夜の枝のなやましきよ

はち切れるごきき精力を身に持たし呼吸をぞむる薔薇のくれなる

わが生存力はいまだ火を知らざる如し油に黒く濡れて輝けき

傲慢なる河瀬の音よ呼吸はけしき灯のまへのわれよ血のごきき薔薇よ

悲しみごきにも歩めかし薔薇悲しみの靴の音をみだすなかれ薔薇

吸ふ呼吸の吐く呼吸のわれの静けさに薔薇のくれなるも病めるがごきし

わがかなしさは海にしあればこのごきき河瀬の音は身に染ます痛し

やうやくに馬の楚音のきこえきぬ悲しき夜も明けむごきすらし

日に蒼みのく神経質になりるしにふごき心づきぬごある冬の朝

餓ふたる蟲幹にひそめる樹のごきくわが家の何處にか冷たさのあり

愛すべきただ一りんの薔薇ありこの日のわれの静かなるかな

斯る孤獨に我が居るまきに見出でたる一りんの薔薇を愛でも惱める

薔薇を愛するはけに孤獨を愛するなりわが悲しみを愛するなりき

虚しき命に映りつつ真黒き玉のまじく冬薔薇の花の輝きてあり

われ素足に青き枝葉の薔薇を踏まんなしきものを滅ぼさむため

薔薇に見入るひこみ、いのちの痛きに觸るるひこみ冬日の午後の憂鬱

悲しみの影も滅びつ見入りたる一りんの薔薇の黒くしど見の

古びたる心臓を棄つるがまじくひややかに冬薔薇のくれなるにひこみ對へり

聞きなれては蟲もまじくやら鐘物の音するまじくしちはや冬なり

愛する薔薇を蝕ばむ蟲を眺めてあり貧しきわが感情を刺さるるまじく

机の前の夜の山よりまひて來し濃みぎりの蛾のこびてやすまず

日光が行燈のこごく灯のかけがわが心の光明の世界に似たり

灯を消すにてそ息を吹けば薔薇の散りぬかなしき寢醒の漸く眠りを思ふこきに

わが悲しみは青かりき、水のこごかりき、火なるべきか石なるべきか

わが煙草の煙のゆくこき、夕陽の部屋薔薇はかなしき憂鬱なる

しづかなる休息冷かなる休息この木漏日のこごき休息

この冬の夜に愛すべきもの薔薇ありつめたき紅の郵便切手あり

ひいやりと腰のあたりがなにものかに觸れしがこごくくづるる冥想

疲れしにや、いないまやうやく痛める眼にかなしき朝を見むとするなり

わが孤獨に根を置きぬればこの薔薇の褪する日永久にあらじこぞ思ふ

思ひつめてはみな石のごこく黙み、黒き石のごこく並ぶ、家族の争論

ゆふぐれのが家の厨の喧燥は古沼のごこし西に高き窓

家のいづこにか時計ありて痛き時を打つ陰影より出でよ出でよ打つ

窓よ暗かれ、わが悲しき孤獨の日に机のばらのさむきくれなる

ついで眼をそらしてつごめの如く薔薇を見る愛する讀書にも尙ほ耽り得ずや

黒鐵のごこき机に身を凭せて薔薇にひややかに眺め入りたる

わが孤獨の悲しみにひそかに觸るるごこく冬の夜の薔薇にうちむかひ居り

懐疑は曇れる海のごこし痛きにほひにいのちも曇るなれ

昨夜のわれごこよいの我ご肉體のほかいづくに係りありて生けるにや

あるがままを考へなほしてみむごころご絶對に新らしくせむごころご

ひこの眼の哀樂はただよく描かれし布の上のつめたき繪なり

こもし斯くもするはみな同じやめよさらばわれの斯くして在るは

いづれ同じここなり太陽の光線がさつきわが眼孔を抜け通れかし

感覺も思索もいちき断れてはまたつなぐべからずつなくべからず

窓に倚れば悲哀は朝のごましく明るく烏に似てわが命の影もさすなり

窓際は悲しめる女の皮膚のごましくないなその如くわれも悲し

わが瞳は涙に濡れてかがやき日に照らされし萬象は死にて冷たし

陽を浴びつつ夜を思ふこころ痛し新しき不可思議に觸るるごまくに

脂肪にや額の皮膚のこはばれる或る冬の日の午後多き蜂

青やかに光れる鎌ひみつ地の上に在り足跡はあれど人は見えす眞晝

髪延びし後頭部にも居るごきし一疋の蜂赤いろの蜂

この山梔子の實に似ても静かなれかし何故にわれのかくあわただしきや

やや深きためいきをつけば机のうへ眞青の薔薇の葉が動く冬の夜

高き窓より一すぢの薄明りさすけなれも冷たしわが眼

窓は傷のごきしいためるいのちの上に光射すごきを恐るなり

窓に向ふごきわが眼古びし蠟のごきくこはばるごきあり瞑ぢて居るべし

窓より光線を見るも厭はしわが眼松の皮なるに似たれば

運命ごは言はじ在るかままのこの一りんの薔薇のごきく悲しきもの

薔薇は薔薇の悲しみのために花ごなり青き枝葉のかけに惱める

なめらかにしてあぶらのごきき夜窓を包めり窓邊には薔薇ごわれ

ランプを手に狭き入口を開けば先づ薔薇の見えぬ深き闇の部屋に

あまりに身近に薔薇のあるに驚きぬ机にしがみつきて讀書してゐるしが

冬をしかみ捉へてわが皮膚の血を注さむとするがこゝき寂しさ

言葉に眞實あれわがいのちの沈黙より滴り落つる短きこゝきばに

忘れものばかりしてゐるやうなおちつきのない男の机の鮮紅薔薇

さうだあんまり自分のこゝきばかり考へてゐた^{あたり}四邊は洞^{ほらあな}のやうに暗い

自分のこゝころをほんこゝに自分のものにするためにたびたび來て机に坐るけれど

全く自由な絶對境がないものなら斯うして眺むる薔薇はうつくしい

晝は晝で夜は一層薔薇が冷たいやうだ何しろおちつかぬ自分の心

と思ふまに薔薇がはらはら散つた朝久しぶりに凭つた暗い机に

ぢいつミ薔薇に見入るころぢいつミ自分に親しまうミする心

薔薇を貰ひに隣家へ姪をやつた人知れぬ涙ぐましい心地で

北向きの暗い机にたびたび来ては坐るがすぐ讀書にも疲れる

斯うしてぢいつミ夜のぼらを見てゐるミきも心は薔薇のやうに靜かでない

薔薇が水を吸ひやめたやうだ玻璃の瓶の冬のぼらが

しかたなさにはらを見てゐるのかも知れぬあかい薔薇つめたい薔薇

考へだせばみながらつほのやうに思へてくる机のうへの冬薔薇の美しいころ

散つてみれば案外な花瓣の大きさ薄さ赤さ冬の夜の机の薔薇

無論さうして働いてうまい物を食ふのもいいさうしてゐる給へ君はほんミに健康さうだ

さういふころもあらうさうであらう何しろ自分は自分で忙しい

太陽の光線は地球の表面だけに機能があるのだらふかなごも考へる

自分をたづぬるために孔を掘り孔ばかりが若し残つたら

朝なご何だか自分が薄い皮でもあるやうに思はるるごきがある

焚火、焚火に限るやうになつたこのごろの自分に最もふさはしい焚火

叔父さん、今朝氷がはつたご姪が呼ぶ、さうか眼が痛いほごいい氣持だ、寢床

冷たい冷たい、ご心からふるへて爐のそばに寄つてゆく、朝のわが身をいごしいご思ふ

木の切端を投げだしたやうにめいめいの朝の膳が並んだ、爐には焚火

ランプの灯は石油のやうな憂鬱で窓の夜ご私ごにそそぐ

さうさ、鰐鼠のやうに飲んでやる、この冬の夜苦い酒

眞黒な布で部屋を張りつめ椅子も机も服までも黒くしたい

父の死後

あなかしこし静けき御魂に觸るるごこく父よ御墓にけふも詣て來ぬ

御墓にまうでては水さし花をさす甲斐なきわざをわがなせるかな

この墓場のつめたきもなになつかしく櫛の木かけを去にがてにする

冷たき見知らぬ境に入るごこくけふもひそかに墓場にぞ來ぬ

櫛のみ茂れる墓場くらき墓場此處にしもつにねむりたまふか

御墓ちかづく墓場小暗き坂みちにこころは黒き玉まかがやく

あわただしく薔薇を摘みきて挿しぬ父逝きてのちのわれのいとしさに

父の死後、いまだ十日を出です、こころ川原の砂の白くすすきみたり

喪の家の爐邊櫛火のかけに赤き母が指姉がのび我が指のさびしさよ

わが厨の狭き深き入口に夕陽さし淵のごとし瞤みて母の働ける

ものいはぬわれを見守る老母の顔のふぐれの爐邊のうす暗さに

いろいろに考ふれき心に染むこころなし來む明日さへおもへば恐し

わが幸福の裏には常にわれを見守る冷笑あり、薄き朝のひかりのごこく

空にひくき冬の朝の太陽底無しさびしき夜より出でて來しわれ

起きいづれば太陽はこく峰にあり、氷れる溪にのぞみたる家

啞を見て笑はずにのられぬほこの浮きたちし心は今朝の空よりも碧し

思ひだしたやうに水仙が匂ふ、水仙が匂ふ朝讀書の机に

朱樂の實、もろ手にあまる朱樂の實いだきてぞ入る暗き書齋に

明るき山かな朝の日のさせり、鳥かも、木の根にぞ啼く

薔薇を手近に寄せぬ、闇夜の雷鳴に氷のごこくふるへ居る机よ

雨のなかの冬の檜の樹灯の窓より檜にむかへる薔薇のくれなる

紺いろの小鳥をたなごころにそつミ握り放たじミする死んだごころ

なんミやら頭ばかりが重たうて歩きにくかりぐつミ踏みしめて

飴のやうに粘土のやうにこのごころ成れいろいろに細工してみむ

やす鏡てらてら鏡、青い鏡に伸びたり縮んだり我がごころ

この繪のやうにまつ白な熊の兒ミなり藍いろの海死ぬるまで泳がばや

きゆうミつまめばびいミなくひな人形、きゆうミつまみてびいミなから

要するにうその話うたはうたへさわがごころ身にやぎらす

啼け、啼け、まだ啼かぬか、むねのうちの藍いろの盲目のこの鳥

安心できるやうな大きな溜息を吐かうまで背延びしたれば頭痛めり

冷ゆればすぐに風邪をひくあはれにもたしかなるわが皮膚かな

餓ゑて一片の麵麩をぬすまむごするごくわが命の眼ひかれり

何處より來れるや我がいのちを信ぜむごつごむる心その心さへこらへがたし

眼をひらかむごしてまたおもふ、わが生の日光のさびしさよ

闇か、われか、眠ざめたる夜半の寢床をめぐれるもの、すべて空し

何にもあれ貪るごごに倦みて來ぬわびしや友情にも

地の皮膚にさせる日光と陰翳とわがいのちの繪具と正午の新鮮

死人の指のうごくごごくわが貧しきいのちを追求せむごする心よ

載るかぎり机に林檎をのせ朱槩を載せその匂ひのなかに靜まりて居る

机のうへ林檎さほんこのなかに小さき鏡を置き讀書の疲れを慰めむす

三つ四つころがれる朱樂の匂ひに書齋は鬱々として病めり、わが讀書

酒の後、指にあぶらの出でてきぬこよひひしほ匂へ朱樂よ

今朝わが頭は水晶のごこく澄めり、林檎よ匂へ朱樂よ匂へ、二月この朝

さほんの實の黄にして大なる、りんごの實のそのそばにして悲しみ匂へる

みちのくの津輕の林檎この林檎手にごりておもふみちのくの津輕

酔うて居れ、酔うて居れほんごうに酔うて居れ外目をしながら心が斯ふ呟く

静座に耐へられなくなればつい立ち立つて歩く貧しい心そのもののやうに

人がみなものをいふうごましさよわがくちびるのみにくさよ

盡くるなき怠屈のうちにあれかしと思ふ、死人のゆびの動く勿れかしと思ふ

わがたいくつの夜の暮の啼くが聞ゆ、雨もまばらにわが心にふりそそぐ

疲れたるか頭よかすかに耳鳴りのする耳鳴りのするいで床へいそがむ

空洞なるわがからだにも睡眠をおもふ時の來ぬしたしき夜よ

何にもあれ、はや塗らむごぞおもふ甕を溢るるつめたき繪具かなしき心

氣に入つた甕でもあらば甕のかたちにはやなりなましわがこころ

身ぶるひをする藍いろの小鳥そのやうにわれの心も、いざ、身ぶるひをせむ

こころの闇に浸みる瀬の音、心のうつろに響く瀬の音、瀬の音、瀬の音

溪の瀬のおこはいよいよ澄みのき夜もふかめさいづくぞやわかこころは

もこめて得ざるこころなしといへる人ありすべて空しといふ人あり、群れるかな

死を感じよ、まことにひこり生けるごこき命を感じよ、まことに感ぜよ

裂けばここの古甕になにももの入りてあるべき入りてあるべき

日向國耳川

あたたかき冬の朝かなうす板のほそ長き舟に耳川くだる

日向國美々津港附近にて

老人よ樂しからずや海は青しやよ老人よ海は青し青し

岩をおこし松をこぐこす、老人のうしろ影その青き松

あわれ悲しいで衣服をぬがはやこ思ふ海は青き魚のこごくうねり光れり

あまり赤く、あまりあまきこの蜜柑かな、海はをんなに似て青く動く日

心のみいらだちて身はガラス玉のこごし海は動くななめに動く

身ぞ染まる、青き笑、人魚の笑、海死にてわが眼石のこごく盲ひたるに

絶壁を這ひあがる、黒き猫こや見えむいまかなしき絶壁を這ひ上る

こかくして登りつきたる山のごこき巨岩のうへのわれに海青し

岩角よりのぞくかなしき海の隅にあわれ舟人ちさき帆を上ぐ

孤獨よ、黒鐵のこきこの岩の上にあざやかに我が陰翳を刻め

さかしくも孤獨のひみみの輝くこきよ黒鐵なせる岩の間に

かなしくも海に濡れたるわがいのち、わが孤獨あわれ太陽よりかくれまほしき

悲しみに身もいらち、黒く巨いなる岩かけに尿をぞする、青き浪の中

うれし、うれし、海が曇る、これから漸く私のからだにもあぶらが出る

蜘蛛が海よりも大きく見ゆ、眼のまへに松よりさがりし蜘蛛

岬なる鬱憂の森、海は病みただ一羽かなしき鳥まへり

身體は一枚の眼となりぬ青くかがやける海ひらたき太陽

岩のあひだを這ひて歩くはだして笑ひて浪こわれこ

鶴が一羽不意にこびたちぬ、岩かけの藍いろの浪のふくらみより

下駄をぬいておいたところへ来た、これからまた市街へ歸るのだ

岬の森よりしぶしぶ歸らむとすれば港の市街にかなしき汽笛鳴る

この帆にも日光の明暗あり、かなしやあをき海のうへに

水平線が鋸の刃のごましく見ゆ、太陽の真下の浪のいたましきよ

太陽の具合で海がわが額の皺のやうに壁をつくる呼吸の苦しいこの窓

わが窓の冷たさよ、海はけふ實にいく度か色彩を變へけむ

少女よ、その蜜柑を摘むこまなかれ、かなしき葉のかげの

ひややかに海より廣き帆の來りぬ、港の旅館の窓のまへに

微雨のなかに鳥まへり海の蒼さ冷たさやうやく夜ならむとするこの窓

光無き海濃き藍色にたたへたり、雨晴れむさして一羽のしろき鳥

闇夜の波は戀するをんなの指のごとし、小ランプをわれこの窓のしたに

窓から下を見おろす、つめたい夜がうなじにも背にも

わがこころ今し鶉のごまぐかへり來よ、夜の窓のひびきのみの満てるに

精力を浪費するなかれ、はくくめよ涙しておもふ夜の濤に濡れし窓邊に

闇に眼の馴れぬあひだの港の市街、戸出づれば濤の四方にくだくる

かなしき月出づるなりけり限りなく闇なれこねがふ海の上の夜に

再び同じ所にて

ごある雲のかたち夏をおもひいでぬ三月の海のさびしき紫紺

春の日の眞黒き岩にあふむけにまろがりて居れば睡眠さしきたる

太陽にあたためられしこの黒きおほいなる岩にいさやねむらむ

白き猫そらになくがにあをうみの春日のかけに啼き居る鷗

われ知らずうたひいだせるわが聲のさびしさよ春日紫紺いろの海

這ひあがり岩のかけより海を見るさびしき紫紺さびしき浪のむれ

おちこちに岩のこがれる、陰翳おほき午後四時の紺の海こなりにけり

岩かぎに着物かきさき爪をやぶりきりぎしを攀つ椿折るこて

潮引きてつかれはてたる岩かぎにせまき海見え浪のうごける

油なし浪ぞねばれる曇り日の海に群れたる海女のおごめ等

高まりたかまりつひに碎けすにきえゆきし曇り日の沖の浪のかけかな

わが頬のかすかの熱や小窓より海見てあれば蝙蝠のこぶ

なみ高し雨後の春日をはらみたる綿雲のかけにみさこ啼くなり

石のごみ首つきいだし二階なる窓に海見つつ疲れはてにけり

けにながく見すありけり海を見にうちいでて來ぬこころを運び

夜の海あぶらのごみく油繪のごみく孤獨をかなしましむる

春のうみ魚のごみくに舟をやるうらわかき舟子は唄もうたはず

海を見てあり海に染められわがこころしばしいろづく海を見てあり

太陽を拜まむ、海もそらもひみつ色なり、いま太陽をおろがせむ

太陽をたのしめごみ心に言ひておそろきて涙ながれぬ

椿の花、椿の花、わがこころもひみ本の樹のごみくなれひみすぢごなれ

紺いろの干潮の海はわがこころの浅きにも似てももの憂かりけり

わびしき濱かな、貝がらのくづ砂のくづいざやひろはむ、海も晴るるに

夜の雨しじにふるなり、沖津邊はかすかにひかりかすかに光る

よるの雨そこもわかぬ海岸にほのじろき泡のつづくなりけり

わがたましひのはしに悲しく染まり居る海の蒼みよ、夜になりにけり

潮引きてあらはれし岩に鷗居り空みて啼けば下りくるがあり

おのづから盲目のごみく岩を踏む、海見れば湧くおもひさびしも

夕陽に透き浪のそこひに魚の見のあるましきこ思ふべからず

默然こ岩を見つめておもふここひに告ぐべききはならなくに

手に觸るるわびしき記憶苦き悔岩をめぐりて浪ぞむらがる

古き繪の布のやぶれにのこりたるわびしき藍の海になりにけり

日本語のまづしさかわがこころの貧しさか海は瘦せて青くひかれり

太陽かがやき引しほの海は羽あをき一羽の蝶となりてうごかず

をんなの匂ひなりけり、ふも雲がわたれば海をあをくかけれる

たらたらと砂そくづるるわが踏めば砂ぞくづるる、ある色の海の低さよ

一灣の海の蒼みのきわが顔に来て苦痛とぞなる

海もまた倦むらし、わが靈魂は曇らんとす、いづくに動き行かむとするや小蟹よ

木の葉にも盛れるがごこく海は小さしわが命燃え燃えて、一すぢの青き煙たつ

椿の木、椿の木、わが憂鬱にきらきらとひらたき海のうつりかがやく

天地創造の日の悲哀と苦痛とけふわが胸に新たなり海にうかべる鳥だにもなし

陰翳を知らざるかの太陽のほこりよりうまれて雲のおりてくるなり

けぶりなし揺れゆるる海の反映陽は黄ばみわが顔の海の反映

ふき浪にむかひてうすく笑ひけり、あやふき岩を降りはてしき

浪のかけより顔をいだせる海女のあり、眼もあをあをこ口笛を吹く

あら砂のすさめるこころ蒼白み海にむかひてうちうめくかな

海よかけれ水平線の動きより雲よ出て来てうみわたれかし

岩かけの浪のひみつこのふくらみに彼女のかほを蒸がき淋しむ

わが顔の海の反映、一羽のかもめしらじらこしてまひいでにけり

日光のかけのこまくにちらちらと海鳥あまたむれこべるかな

鳥のおほさよちひさき波のたちさわぎ海あさあさこかけりきたりぬ

憎めるかぎりのやまかりをみな殺しつくし静けき岩になすよしもなし

酔 樵 歌

われも木を伐る、ひろきふもこの雑木原春日つめたやわれも木を伐る

春の木立に小斧振るここのかなしさよ、前後不覺に伐りくづしけり

さくさく伐りてありしが、待てしばし、しばしはものをおもはさりける

梅の木のしけれるかけに小半ぎきあまり、小斧ふり伐りたふしける

春の木は水氣のたかに鉋切れのよしこいふなり春の木を伐る

山柴の櫛の冬青木のいろいろあるなかに椿まじれるかなしかりけり

椿の木は葉のしければほつたりこつめたき音してつちにたふるる

わが伐りし木木のみだれてたふれたる青きすがたを見てあるしばし

ややありて指にはまめのできてきぬもはややめむこ木かけに坐る

青木伐りつかれて村のむすめたち夜床のくしきはなしをぞする

さびしさにむすめの群に入りゆけばひこりのむすめわれにいふこゝに

峰高み海見をすれば春がすみをさめるをちに青く見ゆかに

ながめ居ればかすみのをちに見えきたる海あり海のなかに島あり

あの山この山粘土細工のごまくにも見えきたるなり淋しみて居れば

人聲ぞこおもへば鴉にありにけり春日けぶれるみねの松山

見おろせばふもこの山の幾うねりうねれるにみな松の生ひたる

をのへなる松の山こそ明るけれそのまつ山に入りゆく樵夫

そこかしこ山に老木の松をもこめ大まさかりをふるふ男よ

そのそばに子さもこ犬さがついて居り大まさかりを振ふきこりのそばに

つぎつぎに伐り倒さるる松の木をながめて居れば春日さびしも

さよめかしまつたく松のたふれ終りぬ大まさかりの汗ばめるかな

峯にのほり鳥がねきけば春がすみ霞める四方の悲しく光る

松の木の伐られしは杉の木の伐られしよりあはれ深かり春の深山に

鶯よ鶯よきて息ひそめ聞いて居りしがまびさりにけり

まつはるはかすみか松の脂の香か峰のこがりの春日かなしも

汗をさまれば霞つめたく浸みきたる峰の上の午後にまほく海見の

ひそひそ山にわけ入りおのづから高きに出でぬかなしや春日

春がすみこもれる山に啼く鳥を驚かさじまわがこころ熱し

峯の上なる老木の松のひこもこの枝のしけみにつぎふ春風

なにはあれ第一の峰にのほらむこかすめる山の背を歩み居り

深山わけ入り朽木の松のふしを掘るその松の節たいまつこなる

けむりありて山に野火燃ゆ、くもり日のひかれるそらを啼きのく鳥

太陽のかかりてのけば悲しみつ雲いでて照ればよろこびぬ蜂のミがりに

わな張りてあたり見かへれば春の山しみらにつちの匂ふなりけり

わな見にしまだきに行けばおほいなる兎かかり居りわれミ見て啼く

わな張りし椿のかけにありにけりうさぎかかりて椿散り居り

霞に濡れて黒くつめたく山がせまる窪地のしけみに雉子待つわれに

かすんだ山にをりをり風が来る、樹が鳴るわが手の銃のつめたさよ

つつの音がわれミわがこころに響く深夜の酒のごこくひびく

我がかなしみに火をつけるやうに、地圍太踏みて鳥を逐ふなり

見知らぬ窪地の灌木原におりて来た見廻せば見廻せば春の鳥啼く

傷つきて鳥かかりたる喬木に攀ぢむきて走せ寄れば青き樅の木

テーブルの上いつばいに枝はひろがり吹き群がる躑躅、夜の青い瓶

ペンさきにしみ出づるインキ、ふみ顔をあぐれば顔をつつめるつつじ

赤いつつじの咲きみだれた夜のテーブルに洋燈をつけてすぐ消した

夜になれば健康の恢復して来るごきくわが身體、ラムプのかけの躑躅

黄色なつつじもあると思ふ、この血のごききつつじのほかに、夜のテーブル

不眠症ごきささぬ窓石外の闇ご、ごきごき机に落つる赤い躑躅

わけごてはなぐちだんだを踏んでよろこんでみた、喜んだごてなににならうぞ

居るごころを失くしたごころがうつごりごかなしい日光を見つめて居る

遠い籠に杉の木かまばらに立つて居る、人の世にある悲哀のやうに

焼酎に蜂蜜を混すればうまい酒なる、酒なる春の外光

わがこころは極りなし、底もなし、ふたもなし、その心まつありやなし

萬葉集、いにしへびこのかなしみに身も染まりつつ讀む萬葉集

人麿の歌をしみじみ讀めるとき汗となり春の日は背をながるる

からくりめけるわれのこころのはたらきのたご止れり、雲雀うららうらら

この國に雪も降らねばわがこころ乾きにかわき春に入るなり

菜の花のほひほのかに身にも浸む二月の日はなりにけるかな

乾きたる庭にたまたま出でて立てば黄き蝶のまひて來にけり

穴だらけのわが心のその穴にこの穴に小鳥が眼を出しびいこなき、びいこ啼く

くちにふくめば疑もなきこのうまさやめられぬ酒の悲しかりけり

さうせ斯うなりア棟木を外せえんやらさ柱ひきぬけそれえんやらさ

藍襖に顔をひたしてしたしたたる藍を見ばやこぞ思ふ

鶺鴒が雲雀の聲によく似るまごころに言ひてあぶく春の日

家出てみればそらには雲雀やまに暮春が悲しこひたなきになく

気がつけばこの春ははまだ椿を見ず、くれなるの花のさびしくおもへり

なまけ者

なまけ者がふこ氣まぐれに芹つみに出でて嘆きぬあわれ春よこ

あはれこは野蒜なりけりあをいろのほそながき草の野蒜なりけり

不孝の兒を持てる老人の心に暫しの安息もなし、二首

春あさき田じりに出でて野芹つむ母のこころに休ひのあれ

餘念なきさまには見のれ頬かむり母が芹つむきさらきの野や

曇り日のかすみのなかに鳥啼き鶺鴒啼き溪にのぞみてこの窓の高さよな

卷末に

溪水

牧水先生もこの頃は全く偶像化され同時に骨董的價置が非常に高く成つた、然し先生の歌を眞に理解し眞にその歌に樂しむ人間は割合少ない。

牧水先生の半折は今日では三四十圓で賣買される短冊も是に準ずる譯である。

だがその歌を研究しやふとする人は全々無いと云つてもいい位である。私は考へたそれがたとへ偶像化でも骨董的でも牧水の名がこれだけに成つたのはいい事である、この際日向の讀書子に是非牧水先生の歌を讀んでもらはねばと思ひ立つたそしてその最も手近な日向の國の歌を編んで一冊誌とする事に決心したのである。

この集に編んだ短歌四百五十首は明治四十五年より大正貳年九月までの作であつて郷里東臼杵郡坪谷村に歸省中のものであつて先生二十八歳より二十九歳終頃までのものである。

集中破調の歌の多いのは内面的生活の然らしむるところも多大であるが當時中央歌壇に於ては破調、口語歌などの猛運動が内藤振策氏などによつて行なはれ相當の勢力を成して居たので多少その風調にも動かされたと思ふ。

(明治大正短歌史概観、齊藤茂吉氏)に寄れば牧水先生の明治大正に於ての歌壇の活動振りは大体左のごとくである。

この期間は明治四十三年ごろから大正三年ごろに至る約五ヶ年を謂ふのである、この期間は(明星)が廢刊に成り(スバル)の歌風に向つて反對運動の起つた時である、そして若山牧水、前田夕暮の歌風が天下を動かし、自然主義風潮に寄つて、尾上柴舟、金子薫園らの歌風も變化し、北原白秋は独自の官能歌を創め、土岐哀果は羅馬字を以て新鮮な歌を作りその影響によつて石川啄木が新詩社の歌風をはじめて脱却して独自の境に進み、新詩社を脱盟した吉井勇、奔放可憐なる戀愛歌を創作し「アララギ」幽かに人の口へのぼるに至る——とある尙、尾上柴舟門から出た牧水は、この期間から歌壇の第一層に於て活躍した、歌集海の聲、ひとり歌へる、別離、路上、死か藝術か、の如きよき歌集を出しその抒情味豊かなる内容と哀韻ふかき歌調とを以て當時の青年の心を風靡した、なほ牧水は雑誌「創作」を編輯し歌話、和歌作法を書いて初學者を教育し、新聞雑誌の歌の譯者たることも既に久しい。

われ歌をうたへりけふも故わかぬかなしみどもにうち追はれつつ
夕陽の赤くしたたる光線にうかび出でたり岬の街は

春白晝この港に寄りもせず岬を過ぎて行く船のあり

海底に眼のなき魚の棲むといふ眼の無き魚の戀しかりけり

蒼ざめし顔つめたく濡れわたり月夜の夏の街を我が行く

夏の樹にひかりのごとく鳥ぞ啼く呼吸あるものは死ねよとぞ啼く

牧水の歌は、同じ象徴的でもそこに常に感傷があり哀韻があり、小味なところがあつた、これスバル派の象徴歌とちがふ點であり、青年のころをひきつけた點であると、尙前田夕暮も柴舟門から出で、

牧水の歌風と違い、無技巧素朴のうちに、西洋近代静物畫に見る如き動きと新鮮さとがあつた、それであるから同時代の青年でも、牧水に類かぬものは夕暮にはしつた、この二人の歌風は相雁行して當時の青年に喜ばれ、歌壇に一期を劃したと謂つていいと、ある。

齊藤茂吉氏明治大正の歌壇に於ての牧水観は大体右のごときものであるが其後の先生の人物なり歌壇は年と共に益々回熟洗練した事は言をまたない左に大体年代順に歌を列記すれば
大正三年

われも木を伐る、ひろきふもとの雑木原春日つめたやわれも木を伐る

春の木は水氣ゆたかに鈍切れのよしといふなり春の木を伐る

わが伐りし木々のみだれてたふれたる青きすがたを見てあるしばし

あの山この山精土細工のごとくにも見ゆきたるなり淋しみて居れば

音に澄みて時計の針のうごくなり窓をつつめる秋のみどり葉

夕かけて照りもいだせる秋の日にさそはれて家を出でにけるかな

秋の葉の日に光るかなひそひそと急ぐははやも散りしきりつつ

秋の森に蝶こそ一羽まひ出でたれやがて青葉にとまりてうごさず

玉に似てころふとしも静まりぬ路傍のおち葉踏むに耐へむや

食はむとてしげしおきたるうす青き林檎に蜂のとまりるにけり

母ひとり拾ふともなく栗拾ふかの裏山の秋ふかみけむ

わくら葉の青きが庭に散りてあり朝はひとみのわびしいかなや
大河の音なく海に入ることく明日にいそがむころともがな
おほぞらに垂れつつ春の雲光りこの林に鴉むれ騒ぐ
つかれはてすわれる岡のもとをすぎ春あさき日の小川流るる

大正四年

朝空に黄雲たなびき鯛のいそぎて鳴けは夏日かなしも
朝霧は空にのぼりてたなびきつ眞青き峽間ひとりこそゆけ
舳路のきわまりぬれば赤ら松峰越しの風にうちなびきつつ
朝雲ぞけむりには似るこの朝けあわただしくも啼くほととぎす
ほととぎすしきりに啼きて空青しころ冷たなる眞蕪なるかな
峰のうへに巻き立てる雲のくれなるの縋せゆくなべに秋の風吹く
みねの風けふは澤邊に落ちて吹く廣葉がくれの葛の白花

大正五年

來馴れつる磯岩の蔭にしみじみと今日し坐れは秋の香ぞする
くれなるの貝は寄らなく磯の藻の黒きばかりに秋更けにけり
ふるさとの秋の眞中をふと思ふおもはね空の有明の月
静心しづまりかねつ酒持ちて秋山さして出でゆくわれは
静心ひとめをいとひ秋山の檜葉もみぢの根を踏み登る

大正六年

朝床の枕のうへにながれ入る樟の葉の風雨よぶらしも
椗の木と山毛櫨ぶなの木立とさしかわす小枝小枝に秋深みたれ
椗の木の瑞枝の伸びのみつみづし山毛櫨の紅葉に入りまじりたる
うつらうつら歩み更かせる春の夜の小暗き濠におつる水音
江戸川の水かさまさりて春雨のけふも煙れり岸の櫻に

大正七年

さやさやにその音ながれつ窓ごしに見上ぐれば青葉詠とそよげり
やはらけき掃のわか葉さざなみなし流れて窓にそよぎたるかも
ふつとして眼につけるかも黒塗の一閑張にうつれる青葉
置かれたる酒杯の酒にもこまごまと静けき青葉うつりたるかな
なみなみと満ちたる酒をながめつつ時惜しみつつ心静まらず
起き出でて見る軒さきの枝葉みな垂れて輝かずけふも曇るなり
軒晴れて風の訝ゆれば貧しさも忘れてうごくわがうらかどち
夕雲の細くたなびき地にひきて輝く見れば秋はさびしき
朝の月ひくくかかりて練馬野の大根畑に日は輝けり
刈りあとの水田ひかりて影うつるわが朝戸出の静けくもあるか

大正八年 九年 十年

この頃より氏の歌は多大なる變化を成した歌集（くろ土）（山櫻の歌）に出でゐる。

天城道三極畑の側ゆけばその花にほふ雪にぬれつつ

大君の御狩の庭としづもれる天城こゆけば雪は降りつつ

天城嶺の森をふかひかうすぐらふ降りつむ雪はつめど音せね

見下せば八十溪に生ふる鋒杉の秀並が列に雪は降りつつ

霞みあふ空の光に籠らひて色さび果てし富士のしら雪

などの様な静寂壯嚴さは當に萬葉の秀歌に何等ヒケを感じない、おのづから心境を古典的ならしむる

であらふ。

× × ×

明け方の山の根にわく眞白雲わびしきかなやとびとびに湧く

うす紅に葉はいちはやく萌ひいでて吹かむとすなり山櫻花

草の根にとまりて啼くよ富士が嶺の裾野の原の夏の雲雀は

羽根つらね浮べる鴨をうつくしと静けしと見つゝこころかなしも

をち方に離れる友をおもふときかがやく珠をおもひこそすれ

朝を注ぐ紅茶の色の櫓の葉のなほ落ちやらす春立つといふに

× × ×

等のごとくその晩年のものは人間としての圓熟と白づからなる寂びを表現するに至つて居る。

聖歌牧水
日の向

昭和八年拾月拾五日印刷
昭和八年拾月貳拾日發行

(定價金壹圓)

編者 宮崎縣延岡市恒富 越智

通規

發行兼 宮崎縣延岡市恒富

延岡パンフレット協會

代表者 越智通規

印刷所 宮崎縣富高町 安藤

印刷所

352
499

